北海道中央ユーラシア研究会

読書会「V. Tolz（2011）を読む」の趣旨とご案内

読書会の目的は、Vera Tolz, *Russia's Own Orient: the politics of identity and Oriental studies in the late imperial and early Soviet periods*, Oxford: Oxford University Press, 2011, 224 p., ISBN: 978-0-1995-9444-3 を読むことです。近年、ロシア帝国・ソ連における東洋学に関する研究が相次いで上梓されました。これらの研究の中でも、マンチェスター大学のトルツ教授が執筆した本書の重要性は際立っているように思われます。刊行された 2011 年の秋には早くも *Ab Imperio* 誌での合評会が組まれ、2013 年にはロシア語に翻訳されました。既に多くの書評が発表されていることもその注目の高さを物語っているでしょう。

本書は、サンクトペテルブルグの東洋学者（特にローゼン、その弟子のバルトリド、マル、シチェルバツコイ、オリデンブルグら）が西欧におけるヨーロッパ中心主義を批判し東西の二分法を相対化し、それがのちのサイードによるオリエンタリズム批判につながったという意欲的な示唆を行なっています。そのため、彼女の問題提起はロシア帝国・ソ連の知識人論の枠を超え、20 世紀ヨーロッパ・アメリカの思想史研究にも大きなインパクトを持つものと言えるでしょう。サイードがロシア東洋学と同様にあまり言及しなかったドイツ東洋学との関係性も問われてくるのではないでしょうか。また、彼女がロシア帝国のみならずソ連初期における東洋学・民族学と政治の関係に言及していることは、ロシア帝国・ソ連の断続性と連続性の議論にとっても重要となっています。さらに、バルトリド、マル、シチェルバツコイ、オリデンブルグ、そして彼らの現地インフォーマント研究者を同時に論じている点は、同じ東洋学の分野においても、とかく研究が専門に細分化されがちな中でとても貴重だと言えます。

本書は 200 頁余という短めの本ですが、読み手に広汎で高度な専門知識を要求するものとなっています。読書会という共同作業を通して本書を読み進めていくことで、ロシア帝国・ソ連の知識人研究に関する新たな展開の可能性を探ることを目標とします。

多くの方のご賛同をいただき、熱い議論を交わすことができればと考えています。

2015 年 1 月 15 日

井上岳彦（札幌学院大・非）

斎藤祥平（北海道大学大学院博士後期課程）